



# おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子



## プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）  
東京で大学・研究室生活を経てUターン  
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる  
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）  
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）  
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

## 「新潟弁促音化現象」

さあ、新しい年がスタートです！今年の干支はへび、へびは古来より神様の使いとも、金運につながるともいわれた縁起物。とくにこれを最後まで読んだあなたの金運・財運はますますアップの良き年です。

新潟ではこのへびを「へっぴ」と発音する地域があります。県内では魚沼地方がその傾向が強いようです。出くわしたら大抵の人は「うわっ！」とのけぞるによろよろへびも、「へっぴ！」と発音すれば、おや不思議。「へび」と濁音Bで強く発音するよりも、清音Pと促音で「へっぴ」のほうが、かわいげに聞こえてくるようです。かつてはへっぴも虫も地域の暮らしの中で人々と共存していたのかもしれない。

この促音をいれる現象は、舌を「しった」と発音するように県内一円でもみられます。なお、「下」は「した」と素直に発音しているようですが、どうやら「舌」と「下」の発音を区別しているようで、新潟人の語彙にはそれこそ舌を巻いてしまいます。

このほかにも促音化現象は盛り沢山。「見た」は、「見った」、「寝た」は「寝った」、「来た」は「来った」、「した」（何か物事を行ったの意）は「しった」と、促音「っ」をいれるだけで新潟弁に変身です。ほかに、これも新潟弁の特徴のひとつ、量を表すことば、「ふっつつ」もあげられます。

「いやっや、正月らっけふっつつ飲んだてば」という場合、「やれやれ、お正月ですからたくさん飲みましたわ」と、すらすら標準語で表現するよりも「ふっつつ」ひとつで酒量も多く酔っ払い度も強いような気がいたします。この「ふっつつ」は「ふとつ」の促音化です。もとは「ひとつ」がなまって「ふとつ」になり、さらに県民の得意な促音化で「ふっつつ」になりました。

どうしてまた、「ひとつ」（一つ）がたくさんに化けたのか、こりゃまた不思議ですが、もともと「一つ」とは、「入れ物に満たん入る量」として使っていた単位用語でした。おそらく、お酒や醤油等の一樽を表したと推測されます。一樽分ふっつつ飲んだらば、それこそへっぴも大蛇ウワバミに変身です。

さて、新潟人ならよく使う「いっぺ」。こちらも単位用語です。使用も「いっぺえ」「いっぺこと」と多彩ですが、「いっぺ」より「いっぺえ」、「いっぺえ」よりも「いっぺこと」と次第に量が多くなっていくのも県民の暗黙知でしょう。

この「いっぺ」は「いっばい」で本来「一杯」であったとされ、数の一杯、二杯というよりも、容器に入る量「目いっばい」を表したと推測されます。こちらの表現も、升か樽で計っていた時代のことですから、まさに一杯の量は「いっぺこと」。今のいとしげな杯やグラスに入る量とはわけが違います。こうしてみると「ふっつつ」も「いっぺ」も日本酒王国新潟ならではの、文字通り味わいのあることばといえましょう。

新潟弁の促音化現象、まだまだ、いくらでもありますが、これ以上書くと読むほうも書く方もよっぱらになるのでまたの機会にとちりお届けいたします！それでは今年も「おもしろにいがた学」いっぺことよろしく願いいたします。

